

◆◆伊勢神宮を支える◆◆ 銅の秘密

神様の道具に、銅が選ばれ続ける理由

金一貫、銀十貫、銅三十五貫——伊勢神宮で20年に一度行われる「式年遷宮」という神事では、社殿がすべて新しく建て替えられ、それにあわせて神様の道具一式「御装束神宝（おんしょうぞくしんぼう）」も新調される。その御装束神宝の調製に、国産の金属がこれほどの分量にわたって用いられてきたという記録が残っているのだ。一貫は約3.75キログラムにあたるため、銅だけでも実に約130キログラムもの量が使われてきた計算になる。伊勢神宮と銅には、どんな関係があるのだろうか。式年遷宮の歩みを伝える博物館「せんぐう館」を訪ね、神宮学芸員の深田一郎さんに話を聞いた。



▲神宮学芸員の深田 一郎さん

日々繰り返される、おまつりという営み
伊勢市の中心部からほど近い場所にある「外宮」の入り口付近に「せんぐう館」はたたずんでいる。池に面した建物は外宮の木々に囲まれており、館内の通路からも美しい景色を楽しむことができる。

受付のあるロビーで目に飛び込んでくるのが、木製の大きな扉だ。外宮の最奥に位置する「正殿」につけられたこの扉は御扉（みとびら）と呼ばれ、通常は間近で目にすることができない。ここに展示されているのは、昭和28年の式年遷宮で調えられたのち20年使われた実物だという。この扉のつくりを深田さんに解説していただいた。

「ヒノキの一枚板で作られており、二枚重ねてひとつの扉を形成しております。これほど幅の広いヒノキ材は現在では手に入りませんので、今は貼り合わせて作られています」

正殿の鍔金具にはすべて銅が使われているそう、扉正面に取り付けられた金具は荘厳

な雰囲気を出している。鍵は厳重なつくりになっており、管理は大宮司が行う。この扉が開かれるのは年に3回のみだが、鍵がさびることはないそうだ。

「大切なものを守るというシステムを、おまつりという形で伝えている、とお考えいただけます。例えば野菜は、朝は葉のものが、夕方になると、おまつりというものが我々にとって非常に身近な存在であることがお分かりいただけると思います」

御扉についてそう解説する深田さんに続いてご案内していただいたのは、日別朝夕大御饗祭（ひことあさゆうおみけさい）というおまつりを紹介するブースだ。

「毎日、朝と夕にお食事を神様へお供えています。例えば野菜は、朝は葉のものが、夕方は根のものと決まっています。朝は消化に良く、夕方は滋養がつくもの。これは我々の食生活の智慧の原点とも言えるかもしれません」

米や魚、海藻、野菜、果物、そして塩、水、酒を毎日欠かさず用意できるのは、伊勢の地が豊かな自然に恵まれていることの証でもある。

「伊勢には、巨大な建造物を建てるための『木材』、それらを運ぶための『川・海・港』、大勢の人を養うための『水と土地』、すべてが揃っていました」

なぜ伊勢神宮はこの地にあるのか、その理由を深田さんはこのように話してくれた。天照大神の鎮座地として選ばれた伊勢には、地の利という側面でも必然性があったのだ。

神宝に息づく、銅という素材

冒頭で紹介した「御装束神宝」は、714種・1576点の武具や服飾品からなる。そのすべてが、原則として国産の素材で作られるのだ。金・銀・銅だけでなく、絹や革といった素材も欠かせない。中でも銅は、道具を形づくる基盤となっている金属素材だ。

「100年から150年前までは日本国内でも銅が盛んに取れていましたが、現在は時代の変化により、かつてと同じように国産品だけで賄うことが難しくなっています」

「国産の素材」という本質をどう守り続けるか。法律や時代の変化に合わせて、その答えを探り続けることが、伊勢神宮にとって終わりのない問いとなっている。

「これほどまでに精巧な道具を作ることができる職人が、今この時代に日本に存在していること自体が、本当のすごさです」

なぜここまで素材にこだわるのか。それは、20年ごとに道具をすべて作り直すことが、技術と素材の知識を次世代へ確実に引き継ぐためのシステムだからだ。銅を加工する技や文様を彫る技術が、職人の確かな仕事によって受け継がれていく。

銅に宿る二千年の記憶

「せんぐう館」の最大の見どころと言えるのが、「外宮正殿」の原寸大模型の展示だ。高さは約12メートルで、現役の宮大工が、実際の正殿と同じ素材を用いて製作したものだ。深

田さんが、正殿の高欄に備え付けられたきれいな玉を指した。

「居玉（すえだま）」と呼ばれる五色の玉が取り付けられていますが、なぜ五色なのかは分かっておりません。この玉を宝石だと思われる方も多いのですが、実は金属です。銅板を丸めて、漆を塗っているのです」

正殿の御扉や木口に銅を使う理由は、装飾のためだけではない。木材に水がしみこまないようにカバーする目的もある。次の遷宮までは大工も立ち入ることができないため、20年間修繕ができないのだ。銅自体はさびやすい素材のため、漆や金めっきを施した金銅鍔金物（こんどうがざりかなもの）として、正殿を守り続ける。

伊勢神宮において、銅は単なる材料ではない。神様の道具を形づくり、職人の技を世代から世代へと運び、日本の素材と技術の歴史を支える、欠かすことのできない存在だ。

「伝統とは、ただ単に同じことを続けているだけではありません。本質を守るためのプロセスの積み重ねこそが伝統なのです。古来からあるものを組み合わせて形にする。これがものづくりの原点であり、究極の到達点なのです」

深田さんの言葉が館内に静かに響いた。20年に一度、銅をはじめとするさまざまな素材が新たな神宝に姿を変えて神様のもとへ捧げられる。そのひとつひとつに、二千年続いてきた日本のものづくりの記憶が宿っている。



▲1年に3回開かれる御扉の錠前（御鎖）



▲御装束神宝の製作工程の展示



▼高欄の居玉



▼外宮正殿の原寸大模型



▲エントランスに展示されている外宮正殿の御扉